

中国チベット地域におけるタンカとタンカ教室の歴史及び現状

沙馬 靖瑤

はじめに

チベット地域は、主に中国西南部山地にある高原に位置し、植物が生えず、農産物も取れない海拔 3400m以上の原始的な土地があり、数カ所の農村ではほとんど遊牧的経済生活が続いている。過酷な寒さと地理的な不便さにより、様々なことが制限されている（馬、2014：167）。中国では貧困層の多くが民族自治地方に住み、貧困地域もまた民族自治地方に多い現実がある（佐々木、2001：426）。自然環境、経済状況等はチベット地域の教育にも影響を与えている。例えば、四川省チベット地域には、1k㎡当たり 13.7 人という人口過疎の状況であるため、2 つ以上の学年 1 つにするという複式学級の形で授業を行う場合がある。また、教育費不足のため、校舎が整備されていない場合もあり、教師の指導力不足や教育水準が低いなど、教育上の問題は山積している。9 年の義務教育就学率は 99%を超えているが、2010 年の Kチベット自治州にある小学校のデータを見ると、中退率は 66%に達している（捌馬、2012：173）。貧困や学業不振、学校施設不足等により、子どもたちの中には学校を中退したり、進学を諦め、農家でアルバイトをする人も少なくない。しかし、基礎教育や専門知識の不足はそれらの子どもの生活自立に支障をきたし、生産にも悪影響を及ぼしている。

このような中、学校から排除された子どもたちの教育の支援に積極的に取り組んでいるタンカ教室が登場した。チベット族の人々にとって、チベット仏教は社会、教育、日常生活に大きな影響を与えるものである。タンカはチベット仏教信仰に属し、チベット文化圏で広く作られる掛軸絵巻や仏神像の図像を指す。タンカの制作、崇拝、観想などの一連の実践を行うことを通して、人間は様々な目的を実現できると信じられている。このように崇拝対象となるタンカだが、文化資源や観光資源となり、エスニック・アートやツーリスト・アートとしても人々を魅了している（張、2018：74）。タンカ教室が登場した際、一部のタンカ教室の設立者はタンカを勉強することによって、伝統的なものを伝承でき、基礎的な知識と仏教を学習し、今後の生活を自立できると考え、学校から排除された子どもに注目した。このようなタンカ教室では子どもたちに無料で授業を受け、宿泊場所や食事を提供し、月ごとに生活費も払うような形で支援を行っている。本稿では、チベット地域におけるタンカの歴史とタンカ教室の展開を概観し、現在のタンカ教室の実態を明らかにする。

1. 中国チベット族と教育の概要

1-1. チベット族の概要

中国は 56 の民族を有している。ほぼ全員が仏教を信仰し、独自の文字、言語、文化を有するチベット民族はその一つである。1247 年、中国では政権を握っていたモンゴル帝国（元

朝)がチベットに進出し、チベット全域に対して大きな権限を持つようになった。さらに、1724年から1732年にかけて、清朝の雍正帝は、チベットを西藏、青海地方と甘肅省、四川省、雲南省などの諸省に分属させる地域に分けた。1955年、中国政府はほぼ清朝の地域区分で省級の行政区画を行い、チベット民族自治区を西藏部分のみに限定し、その他のチベット各地を諸省に組み込んだ。従って、現在チベット族の人たちはチベット自治区に居住するだけでなく、青海省、甘肅省、四川省、雲南省に設置されているチベット族自治州、自治県、自治村にも住んでいる。2016年のデータによると、チベット族人口は約700万人ということである。



図1 チベットの地理的構造 (筆者作成)

仏教は政治からチベットの人々の日常生活にいたるまで、すみずみまで浸透している。7世紀、吐蕃時代に仏教がインドから伝来した時から、チベットは仏教と結ばれ始めた。10世紀から13世紀にかけて、チベット仏教の各宗派は成立した。それらを支えていたのはその地域の血縁関係にある氏族であった。例えば、サキヤ派という宗派はクン氏という一族が中央チベットのサキヤに修行道場を建てたことに始まる。同様に、カギュー派が起こり、さらにディグン派、パクモドゥ派、カルマ派などに分かれた。後にダライ・ラマを輩出するゲルク派はもっとも成立が遅く、15世紀に成立した(吉水、2016:150)。

1-2. チベット地域における教育

チベット仏教は教育とも関係が深い。その一つに、寺院教育がある。8世紀後半、300人以上の貴族や平民はサムエ僧院で出家儀式を行い、寺院教育を受け始めた。サムエ寺は最初の寺院教育の施設として認められた寺院である。チベット仏教において各宗派は自身の教育システムを形成したが、最も完備な教育システムを備えているのは15世紀に創立したゲルク派である。ゲルク派の寺院教育は、勉学組織と運営組織を分別し、ダンス、彫刻、建築、チベット医学等の課程も含まれ、人材育成や伝統文化伝承に重要な役割を果たした。しかし、寺院教育は僧侶の養成、宗教の伝承に焦点が当てられており、現代の科学技術に

一切関わらず、閉鎖的だというイメージが強い。現状を見ると、チベット地域で近代教育が開始され、現在のような学校が整備され、義務教育が普及されることに伴い、チベット地域における寺院教育の影響力は少なくなっている（邵、2010：95、109-111）。

このような中、中国政府は少数民族の教育を発展させるという課題に対して、民族言語と漢語の同時教授や、少数民族の学生に対して、相対的に低い点数でもいい大学に入れるという少数民族予備校を設置すること等に積極的に取り組んでいる。チベット地域に特有の教育政策としては、内地で設置されたチベット民族学校と四川省チベット9+3教育制度が挙げられる。1984年12月、中国政府は北京・上海・天津など19の市及び省に対して「速やかにチベット学校とチベットクラスを創設し、毎年1300人ないし1500人のチベット族の生徒を募集する」ことを指示した。内地におけるチベット中学校においてはチベット語による授業を実施するとし、それに漢語の学習を加える体制を取り、高校においては漢語による授業を主とし、それにチベット語と外国語の学習を加えるものにした（崔、2004：110）。9+3教育制度は2009年から開始された制度で四川省チベット地域における子どもが9年間の義務教育を終えた後、3年間の職業学校出の教育を無償で受けることができる制度である。これは高校、大学に進学できない子どもたちに、新しい可能性を提供するものとして期待されている。知識を学び、技術を身につけ職業学校を卒業する子どもの多くが故郷に戻って仕事することによって、四川チベット地域の安定や発展に役立つと考えられたのである（張、趙、2018：91-92）。

2. チベット地域におけるタンカの歴史および現状

チベット語ではタンは広い空間の意味で、カは空間に埋めるという意味として解釈される。主に、仏教の仏像や護法神等をテーマとしている。チベットに仏教が伝来した時、チベット族の殆どは広大な草原に暮らす遊牧民であり、季節移動の際、遊牧民の利便性を図り、持ちやすい巻物の仏像を造ったことに由来するという（喬旦、2016：208）。

タンカの歴史については、チベットとチベット仏教を理解する必要がある。7世紀、吐蕃王国のソンツァンガムポ王の時代にインドから仏教が伝来したことに伴い、大量の仏教経典をチベット語に翻訳し、その際、王が唐やインド、ネパール等の国から優れた美術工芸師を招き、現在有名な観光地となっている大昭寺と小昭寺等を築き、チベットの代表的な故事や大昭寺の建築史などを寺院の壁画として描いた。タンカの誕生についてはまだ定説はないが、ソンツァンガムポ王自身もタンカを学び、鼻血で初のタンカと考えられる護法女神を描いたという。「タンカ」という用語は12世紀のチベット語文献『バシエ』に初めて記載された（叶、2008：14）。

吐蕃王国末期、当時のチベット首領は仏教寺院・仏像・経巻を破毀し、仏教を廃する活動を行うことによって、タンカを含むチベット仏教文化がほぼ失われ、一度は途絶えた。842年には、吐蕃王族の一部が西チベットでグゲ王国（古格王国）を建国した。10世紀、グゲの王は仏教再興に熱心で、仏教先進国であるカシミールへ留学僧を派遣し、当時の最先端であるカシミール様式の寺院、建築、壁画等を導入し、グゲ独自の文化、芸術が栄えた。10世紀以降、荒廃した仏教を復興させるために、徴税と労役における僧侶の特権を獲得し、寺院の建築や、当時中国を統治するモンゴル帝国への布教活動に積極的に取り組ん

でいた。モンゴルからも優秀な仏教僧を輩出し、チベット仏教を支えていくことになる。(吉水、2016:150)。モンゴルから石彫師、絵師を招聘し、数多くの壁画や仏像、タンカ等が作られた。国や地域間の交流活動も行われ、優れた絵師を輩出するに伴って、タンカは体系的、理論的に発展し、普及した。

以上のように、14世紀になるとこの地域にチベット仏教が広範囲に普及したが、15世紀以降にはサキヤ派に加えて、ゲルク派も台頭し、各地に僧院建築がさらに発展し、タンカ等の需要が拡大した。17世紀半ば、チベット仏教ゲルク派の高位のラマであり、チベット仏教で最上位クラスに位置し、チベットとチベット人民の象徴たる地位にあるダライラマによるダライラマ政権が成立した(吉水、2016:151)。1654年、ダライラマ5世が各流派総計600人以上の絵師を招待し、チベットの中心地ラサに築いた宮殿の遺跡を増補、拡充する形で建設された。その際、絵師人数の増加によって、絵画会等の団体が現れた。大昭寺には「タンカ教室」が公式的に設立され、大量の優れたタンカ作品を完成させ、大いに栄えることになった(叶、2008:21)。賞賛を浴びた成果は宇宙の概観や体の器官、医療器具等を描いた自然科学といったタンカやチベットの歴史を時系列に描いたタンカであった。

1966年7月、チベットにおける文化大革命が開始された。大量の仏像やタンカ等の作品が徹底的に破壊され、数多くの工芸伝承者が投獄された。文革後、美術専門家と民間の工芸家を中心にタンカ工芸の頂点としたレプコン芸術¹を速やかに復旧するために、芸術研究会を成立し、タンカ展覧会等を開いた。2001年8月に第1回「レプコン芸術祭」が開催され、レプコン文化がアピールされた。2009年にはタンカを含む「レプコン芸術」がユネスコ世界無形文化遺産に正式に登録された(張、2018:32)。これによりタンカの価値が広く認められるようになり、タンカの宗教性とはかかわらず、芸術性が求められるようになった。さらに、機械化によって量産された観光タンカが市場に登場した(張、2018:88)。現在は、タンカの産業化が進められ、宗教的なタンカや芸術的なタンカ、観光的なタンカが併存している。

3. チベット地域におけるタンカ教室の展開と現状

タンカの製法について、まず、設計図を描くことは絵師らが基本的に守らなければならない技法であり、タンカを学ぶ人にとって最初の基本的な入門科目でもある。設計図とは、基本尺度と製図線を含む全体の構図であり、制定された神像や仏像、高僧など人物の形像の法則である(喬旦、2016:215)。次に、色を塗ることであるが、ほとんどの顔料は天然物であり、長期間保存できる。天然鉱色粒は基本的には相互に混入可能だが、いくつかの組み合わせは化学変化を誘発して、或いは比重の差によって良い結果を産むことができないため、混色法理論は絵師の間では重大な関心事であった(小野田、2012:7)。タンカの製作過程では、色の上に枠をつけた後、仏像に尊い魂が入るとされるため、高僧が招かれて開眼法要が挙行された。製作過程の最後では、書画の軸装のような表装にタンカが縫い付けられる。このようなタンカの製作は極めて複雑であり、難しいである。立派なタンカ絵師になるために、長年の勉強が不可欠である。一般的には、タンカの修業年限は7年から10年までであるが、人によっては延長することもある。

17世紀、ダライ・ラマ5世は各地の絵師を募集して、寺院建設のために集中的にタンカ

を創作させた。その時から 1956 年中国の民主改革まで、タンカの伝承方法は主に寺院伝承である。1956 年に民主改革が行われ、多数の僧院が閉鎖され、僧侶は寺院からの退去または還俗を強制されたことにより、家庭や民間の伝承はタンカ伝承の主要方法として移り変わった。現在、「タンカ工房」と「タンカ画院」などが出現しつつあり、タンカの伝承も時代につれて変遷し、寺院伝承、民間家庭伝承、学校伝承、企業伝承といった四つの伝承方法が形成された（馬、2019：42）。

3-1. 寺院におけるタンカ教室

歴史的に寺院におけるタンカ教室が登場したのは 1654 年のことで、ダライ・ラマ 5 世が多く絵師を各地から招き、ポタラ宮を建設したことによって、大昭寺にタンカ教室のような「絵画室」が公式に設立された。僧侶を中心に、師匠は弟子に芸や技を教え、伝えるような形で、寺院におけるタンカ教室がタンカ伝承の大役を務めている。以前、各家から 1 人か 2 人の男の子を 7 歳になったら僧院へ送り、僧院で系統的にチベット語や経文、タンカなどを勉強させていた。当時は十数年間にわたってすべての絵師の専門知識を身に付け、出身僧院と周辺のチベット地域へ出稼ぎに出ている（喬旦、2016：213）。一方、寺院伝承がタンカ伝承の主要な手法であった時代に、女性はタンカを勉強する機会がなかった。また、寺院にタンカを描く僧侶たちは絵画で知られているものはほとんど全部といってよいくらい宗教的なものであった。宗教は美術の中に一層強く浸透しているといえるが、彼らはつましい職人とみなされ、個性的な作家と考えられることはなかった（牛、2008：42）。

現在、多くの僧侶が還俗することに伴い、タンカの民間伝承という方法が盛んになっている。また、義務教育の普及により、小さい頃に出家する子どもは少なくなり、寺院のタンカ伝承という役割は小さくなっている。また、僧侶たちが民間のタンカ教室でタンカを勉強することも一般的になっている。このようなタンカの伝承の変化の中、一部の僧侶は寺院で一般の人は出家しなくても、タンカを勉強することができるという新しいタンカ教室が開かれるようになっている。例えば、四川省のアバチベット自治州における寺院は、学校に通わない子どもや障害児に向けてタンカ教室を設け、タンカによる支援組織をつくっている（沈、2013：59）。

3-2. 家庭、民間におけるタンカ教室

タンカの家庭での伝承は、主に父子相伝という形で続けられている。子どもたちは家庭の影響を受け、小さい頃に父親からタンカを描く技法を勉強する。家の女性たちは、父親や夫にタンカを教わり、タンカの技法を勉強できるようになった。タンカが「男性だけ」に限られている伝統を破ったのである。しかし、師匠が支配的な地位を持つという教授法にはいくつかの欠点がある。まず、学習する側は師匠の絵画の性格の影響を受け、自己流でタンカを創作する人は少ない。また、師匠が指導力不足の場合は、学習者たちの能力を伸ばすことによく影響を及ぼす。さらに、家庭におけるタンカの教授は学習の課程とはいえ、科学的、体系的な方法が欠如し、単一化している。オリジナリティーに富むタンカを制作することに弊害が生じるとされる（胡、2006：70）。

その一方で、タンカの学習は盛んになった。親戚や友人は家族内や地域内のタンカの巨

匠に子どもを通わせ、タンカ技法の交流が盛んになったのである。学習者の増加に伴い、有名なタンカ絵師は自分のタンカ画院やタンカ工房を開いた²。このような民間におけるタンカ教室は徐々に成長して大規模なものになった。タンカ教室では、タンカの教授だけでなく、販売、陳列等の役割を同時に担い、1階を店舗に、2階を教室にするのは一般的であり、主にタンカ販売の売り場で教室が運営された。絵師はタンカを学ぶ人の食費、宿泊費、タンカの方法料費を払うような形で、タンカを教えた。学習者たちは3か月或いは半年に一度、絵画能力の測定を受け、才能ある者が選ばれ、勉強を続けることができた。成果を出した学習者たちは自身のタンカ教室を開き、タンカによって経済的に自立できるようになった（張、2018：103）。現在、一部の絵師はタンカの支援効果を重視しており、障害児や貧困状態にある子ども、学校から排除された子どもにタンカを学ぶ機会を与え、タンカを通じた支援活動を展開している。現在のタンカ教室はチベット地域における子どもの自立支援の場、機会を提供するものとして注目されているといえる。

3-3. 学校におけるタンカ教室

学校におけるタンカ教室とは、中学、高校に開設されたタンカの授業と、大学や専門学校に設置されたタンカ専攻課程を意味する。他には、大学が開講したタンカ体験授業や高等教育機関が連携して開催されるタンカの方法授業も含まれている。

まず、中学、高校におけるタンカ教室は、主に放課後または週末に開設されたタンカ授業である。タンカに興味がある生徒はタンカの授業によって高等教育の芸術専攻に進学することができるが、中学、高校では、タンカの授業への参加は強制ではなく、子どもたちに興味があれば参加できる。しかし、子どもたちの多くは進学の際に志望校の受験のために、必修科目に専念しなければならないため、タンカの授業に参加する子どもは少なく、減少傾向にもある。また、中学、高校におけるタンカの授業内容は統合されておらず、体系化されていない。タンカを教える教師らも指導力不足であるという指摘もある。現在は、中学、高校のタンカの授業が窮地に陥ってしまった（馬、2019：43）。

高等教育においては、1985年、西藏大学は初めてタンカ専攻を設置した。高等教育に相応しいタンカ技法が完成し、チベット伝統絵画も体系化、理論化していくこととなった。このような高等教育機関では、優秀なタンカ人材を育成することに重点が置かれている。しかし、タンカ専攻課程の創設者であり、タンカの巨匠であるD先生は以下のように述べていた。「大学生らはタンカ専門課程に限らず、共通課程を学ばなければならない。そのため、タンカ専門の授業時間を短縮しかできないし、理論と絵画技法をまとめて教授する機会が多い。民間のタンカ教室でタンカだけを勉強する子どもたちと比べると、大学生らは大学4年、修士2年の6年間にタンカを描く時間は実際に少ない」（王、2007：15）。

しかし、現在の高等教育機関の間では、タンカに関わっている交流活動が盛んに行われていることも指摘できる。そのため、民間の著名なタンカ絵師を招き、タンカ体験授業を開講する大学も珍しくない。例えば、2018年9月に、中国の中央民族大学は民族文化の伝承や民族人材の育成を理念として、「無形資産—タンカの方法クラス」というプロジェクトを開催した。このプロジェクトは1年の中で、理論学習、見学、描画と成果のプレゼンテーションを含み、異なる地域、異なる文化の人々にタンカを勉強する機会を与え、より多くのタンカ伝承者を養成することを目的としている。

3-4. 企業におけるタンカ教室

チベット文化の広がりやチベット地域における観光地への注目が高まることに伴い、チベットの代表的なものであったタンカはさらに発展しており、商品として流通するようになった。とりわけ、青海省黄南チベット自治州のレプコン（熱貢）地域のタンカは上品で、緻密な技法と鮮やかな色が特色であり、広く知られることになった。多くの業者はレプコンでタンカを仕入れている。1996年、「レプコン芸術開発会社」が設立され、レプコンにおける有名な絵師16名と契約し、タンカの製作、生産、宣伝広報、販売を行う。有名な例として、この会社は3年間にわたって、長さ618メートル、高さ2.5メートルの世界で最も大きいタンカを作り上げた。レプコンタンカはブランドとして、世界の関心を集め、人気の要因でもあると考えられる（李、2013：67）。

その後、レプコンのタンカ企業は次々と設立された。企業は有名な絵師を招聘し、生徒も募集し、企業内でタンカ教室を設置するようになった。タンカ人材を育成すると同時に、制作されたタンカに対し「村から都市へ」といった販路を展開し、販売に重要な役割を果たしている。例えば、「レプコン龍樹画院」という会社は2010年に設立された。企業の敷地面積は9700平方メートルで、7600万円の固定資産があり、現在98人の生徒を抱え、職員162人を有している。毎年、生徒の宿泊費、食費、タンカの材料費等は200万円ほどかかるという。今までで、タンカによって自身で起業する生徒は390人を超えている。年収300万円は30人ぐらい、年収100万円は60人ぐらいということである。家庭におけるタンカ教室より、企業におけるタンカ教室は規模が大きく、多くの学生が勉強できる（張、2018：84）。また、大手企業と社会、市場のつながりもより緊密であり、タンカの販売にも役に立つという。

おわりに

本論を通して、中国チベット族の概要、チベット地域における仏教の歴史、タンカの歴史とそれぞれの場面におけるタンカ教室の実態、展開について整理した。

第1章では、チベット地域の歴史、行政区画とチベット仏教の形成についての概要をまとめた。また、チベット地域における教育については、寺院教育と学校教育を取り上げ、その現状に言及した。第2章では、タンカとは何かについて紹介し、タンカの歴史とチベットの歴史、チベット仏教の歴史とを重ね合わせ整理した。現在のタンカは多様化であり、その価値も広く認められている。第3章では、タンカの伝承方法は寺院伝承、民間家庭伝承、学校伝承、企業伝承であるということに基づき、それぞれの場面のタンカ教室を分析した。以前の寺院伝承がタンカ伝承の主要手段であった時代は、学習者は僧侶中心であり、女性のタンカ学習の機会はなかった。また、宗教は美術の中に強く浸透しており、タンカの発展に支障が生じると考えられた。現在は、出家する人が少なくなり、寺院におけるタンカ教室の重要性も小さくなっている。

一方、家庭や民間のタンカ教室は家庭を中心に行われていたが、有力な絵師は親戚や友人の息子も受け入れ、それによる人数の増加に伴い、小規模なタンカ教室が開設されるようになった。また、学校に通えない子どもたちを対象とした支援活動を行うタンカ教室も登場した。さらに、中学、高校、大学といった教育機関でもタンカ教室やタンカの授業、タンカ専攻が開講、設置され、タンカの教授は体系化している。タンカに関する高等教育

機関の交流活動も一層活発化している。このような中、タンカの需要拡大によるタンカの製作、販売、宣伝を行う企業が開設された。タンカの生産、販売は拡大し、タンカの学習者も増加しつつある。現在のチベット地域において、タンカとタンカ教室の存在意義はますます高まっていると考えられる。

注

1. レプコン（熱貢）芸術は、青海省黄南チベット族自治州同仁県における生成した建築、タンカ、彫塑等を含める宗教芸術流派のことである。
2. タンカ画院やタンカ工房など、さまざまな名称があるが、本稿では「タンカ教室」に統一する。

参考文献

- 王金峰（2007）「新勉唐画派唐卡大師丹巴绕旦之研究」首都師範大学。
- 牛黎濤（2008）「チベット近代の寺院教育」『佛教文化学会紀要』（16），31-48。
- 小野田俊蔵（2012）「チベット絵画で使われる色材とその混色例—デウマルゲシエの色材知識（ページュとアイボリー）」『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』（9），1-22。
- 胡青華（2006）「藏族唐卡絵画芸術的傳承方式与趨变特点」『青海師範大学学報』（4），68-71。
- 胡珊（2016）「唐卡芸術的傳承与保護研究」四川師範大学。
- 佐々木信彰（2001）「中国経済発展と少数民族」『国立民族学博物館調査報告』（20），417-427。
- 沈衛榮（2013）「在我们的国学教学実習基地四川省壤塘県藏哇寺行記」『行遊』，56-59。
- 邵陵（2010）「反省与求証 四川藏族教育研究」四川大学。
- 張詩雋（2018）「チベットタンカの変貌—タンカの芸術化と観光化をめぐる」京都大学。
- 張林杉（2014）「藏族地区中学美術課程教学思考」廣西師範大学。
- 張琪、趙文韜（2018）「教育均衡發展在四川甘孜藏区 9+3 免費中職教育中的实践与創新」『職業技術』17（12），90-93。
- 喬旦加布（2016）「レプコン芸術の無形文化遺産登録とその後の動態：中国青海省同仁県における考察」『国立民族学博物館調査報告』（136），203-223。
- 張明艷（2018）「熱貢唐卡文化産業發展研究」中央民族大学。
- 馬平（著） 辺境・市川聖（訳）（2014）「近代環チベット地域における回族の内陸貿易」『島根県立大学総合政策学会総合政策論叢』第27号。
- 馬慧卿（2019）「教育精準扶助貧視野下的民族工芸傳承—以甘肅省 Z 中学唐卡工芸為例」『文化學刊』（11），43-44。
- 捌馬阿末（2012）「近十年藏区教育發展、困境及突破—以甘孜藏族自治州為例」『西南農業大学学報』10（1），172-176。
- 吉水千鶴子（2016）「チベット仏教の世界：仏教伝来からダライ・ラマへ」『ヒマラヤ学誌』（17），146-153。
- 叶星生（2008）「西藏唐卡的歷史沿革和芸術特色」『芸術評論』（6），13-22。
- 李元元（2013）「神聖与市场之間 青海省黄南西蔵族自治州唐卡文化産業与民族社区研究」蘭州大学。
- 崔淑芬（2004）「チベット教育の沿革と現状」『筑紫女学園大学紀要』（16），99-120。